

せ  
た  
か  
む  
い

発行：古平町史編纂室  
古平町文化会館 42-12590  
第159号・平成14年12月1日

年表で読む

古平の歴史

《65》

## 金融機関の移り変り

## ■急激な移住者の増加

明治五年の調査によると（初めて全国的に戸籍が作られた年）、古平郡の戸数二四七戸、人口一、一三三人とあります。

明治になると、北海道の開拓と産業を起すこと、ロシヤの南下に備えての防備が新政府の最大の課題となり、北海道への移住や、開拓に当たる人々にはいろいろな道から特典が与えられました。

新しい生活や成功を期して、未開の新天地である北海道には単身で、或は一家を挙げて出稼ぎや移住して来る人が急激に増えてきました。

明治二年、古平郡の記録では

当時の人口二、〇〇〇人ともありますが、これは鯉場の出稼ぎの人たちも含めた人数ではないかと思われまゝ。しかし、その後は全道としてはもちろん、古平郡の人口も急速に増加して、明治四〇年には七、〇〇〇人を超える程になりました。

このような人口の増加と生産業の発展、それに伴う商業活動が盛んになると、金融機関が各地に設立されるようになりました。

## ■早くも銀行が出店

明治九年（一八七六）、三井銀行は設立と同時に札幌と函館に出張店を開き、同二〇年には、古平を含めて道内に六か所の出張所が置き、三井銀行古平出張所は古平郡役所の二階で営業を始め

ました。ここに金融機関として『銀行』という名前が初めて出てきました。

三井銀行古平出張所は、主として郡役所の公金を取り扱ったようですが、同一二年の古平水産物営業組合の規約書には、預金先として三井銀行古平出張所を指定していました。

明治二六年になると銀行の公金取扱いは高の減少や、各地に銀行の設立が相次いだことなどで、三井銀行は寿都・岩内・石狩などと共に古平出張所を廃止しました。

その翌年には余市町の猪股安之丞、林長左衛門外の発起で余市銀行が設立され、古平郡港町に支店が置かれ、漁業資金の供給を目的としていました。

## ■個人金融と貸金業

道内や本州方面から、新しい事業や仕事を求めて古平に移住する人が多くなってきましたが、それらの人たちは土地を求め、さらに家を建てることに努力しました。

漁業をやろうとする人たちの

多くは資金を個人から借りましたが、一般に利息が高く、その支払いに苦しむことになり、取得した土地などを抵当にしたので債権者にその権利が移ってしまい、成功して自立出来たという人は少なかったようでした。

大正七年の町の営業種別に、初めて『金銭貸付業』という業種が見られ、五軒が営業しています。

その氏名はありませんが残っている多くの証文から、その外にも漁業家、海産商、商店などが、個人的に金融に大きくかかわっていたことがわかります。

△明治年代の借用証書▽



借用金証書

一  
金貳拾圓

但利子百四に付是月ノ  
國主王主ノ

右之金貨據云要國の財源に供  
るゝに處て實也然る上と云ふ者之辭也



借用證

一、金五拾四也

但利子言今月松田氏於城之定

右六家并上西用之儀由來正前書之全  
願を殿より儀取借用申す處確  
實や然らば上は追金之儀に事々明合三檢

# ■繁盛した質屋

当時も一般の人たちにとって最も身近かで、気軽に利用できた金融機関は質屋でした。

明治二〇年頃、新地町の野村源吾が、雑貨商をしながら質屋をしていたという記録があります。昭和二四年の古平町大火にも焼け残った、新地町のもと本・本間愛蔵商店裏の石蔵はその質蔵でしたが、後に解体されました。

同三〇年頃から、港町の松岡屏之助、浜町山田治助、平野五十郎が順に開業しました。もと近藤医院の石蔵は、平野五十郎の質蔵でした。

△質物台帳・庄司彦治▽

明治四十年八月起

## 質物臺帳

北野泰持  
庄司彦治

その後、経営者が替わってもそのまま四軒が営業していまし

たが、大正年代になると廃業するところもあつて、最後まで残っていた山田質屋も終戦後間もなく廃業してしまいました。

質屋の営業については、ときには犯罪にも関係することから警察がその監督、取り締まりに当たっていました。

■記録に見る古平の金融  
河野常吉（大正四年から一三年まで、北海道史編さん主任を勤める）の『後志国状況報文』（明治三三年）によると、古平の金融のことについてふれ、

「金融機関はまだ整っていない。商人の多くは互いに商品を融通し合つて運転している。そして商人同士の金利は、二分から二分五厘、漁業家は三分から四分である。近年は漁が思わしくないのか、金融は円滑とは言えないようである」

### ■「講」が組織される

庶民の間では江戸時代から普及していたという講といわれる、何人かが集まつて一定の金額を出し合い、互いに金銭を融通し合う集まりが町内の処々にできました。

古い記録では明治一二年頃から、知り合いや親しい仲間同士で資金の融通を図るため、頼母子講（おもしろ・互いに金銭を融通しあう目的でつくられ講）が組織されていました。

明治二八年、浜町の本間録郎が代表者となつて『古平共益合資会』を組織して、五年間継続の月掛け貯金を始めました。その後、代表者が高野常吉に替わりましたが、五年後に完了して解散しました。

### ■寺を中心にした会

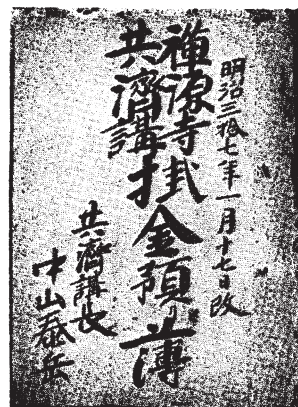
明治二九年、滋賀県から来た説教師・花木静心の勧めで、宝海寺の住職西館純一が会長になつて『真利会』を組織しました。二〇〇人程の会員が集まり、毎月一人一五銭を積立て、二〇年を満期とし、途中で会員が死亡したときは葬儀料として三〇円を支払うというもので、檀家の外、他宗の住職なども参加していました。

このような会は、後に三山神社の大川恂作、正隆寺の住職大石養淳も組織しています。

明治三〇年、先の真利会にな

らつて、禅源寺の住職・中山泰岳も自分が講長になつて『共済講』を組織しました。

△禅源寺共済講掛金預り簿▽



これには檀家の外、美国町からも申込者があり、六〇〇口の共済講とし、加入者主には共済講員証を渡しました。毎月一〇銭を積み立て、二〇年満期として三〇円を支払うというものでした。

ところが明治四四年になり、この共済講は生命保険にまぎらわしい制度であるということから、解散しなければならなくなりました。そこで、三千数百円の預金を講員口数に応じて支払、清算をして共済講は解散になりました。（この項続く）



# へ大正一〇年

12/19 大吹雪で雪が一尺以上も積もる。海は大時化だ。電灯会社では、昨日の大時化で湯内辺りで故障が続き、かんじきを四足買い人夫を連れて出かけた。夜になり故障も直ったのか点灯した。年賀状を書く。その後困から頼まれた正月売出しのピラを書く。

12/22 今朝はずいぶんと寒い。海は時化でカレ網も休む。雪は毎日のように降る。今日は冬至でカボチャを食べる。寒さがきびしく、戸外を通る人の足下がキュッキュッと鳴り、湯屋から帰りの手拭いが棒のようにしばれる。

12/24 近年にない大雪だ。カレ網はそれ程漁が無いというが、松田 田附の船は五〇〇貫から獲ったとのこと。これから漁はあるだろうから元氣もつく。明日、餅つきをやるので米とぎをしてい。

12/25 今日寒い。三〇度F(マイナス一・二度C)だ。カレ網は休む。年内は余り漁が無かったので不況だ。三時頃から餅つき

を始める。子どもたちも大喜びだ。一〇時半頃に終わる。割に早く終わった。

12/27 今朝はずいぶん暖気で天気も良い。カレ網、タラ網は皆出る。昨日までは三〇度Fぐらいだったが、今日は四〇度F(四・五度C)以上もある。帳簿調べをしたが掛け売りが三二二〇〇円程。来年五月までの支払いをふくめると四、〇〇〇円は

## 高野名幸作さんの日記から

### 当時の世相を見る

【60】

ある。

12/29 ヤマセが吹いてきた

が、漁に出た船と休んだ船がある。今日から学校も休みなので家の中も賑やかだ。夜は電灯会社に大勢集まりカルタ取りをしている。店まで声が聞こえてくる。年末だというのにえらい意気込みだ。正月のくじ引きのくじをこしらえる。

12/31 (次ページに掲載)

## へ大正一一年

1/13 今日朝から雪が降り寒さもきびしい。毎日毎日の大雪で町中は雪の処分に困っている。新聞町辺りでは屋根の高さくらいまで道路に雪を積んでいる。こんな雪は近年稀なことだ。刺網の時期で二二〇円余りが売れた。ほかに現金の分もあるので二、〇〇〇円余り出た。今日も時化で、年が明けてからまだ三日しか出ていない。ナギレ

ば漁があるのにこれでは困ったものだ。

1/16 学校は今日が始業式

である。カレ網は皆出たが途中から戻った。値段が高いので元氣は良いが、大漁してもらいたいものだ。信用組合二階で部落会の総会がある。余興として吉田一若の浪花節がある。大勢の人が集まった。

1/17 今日また雪で寒さが厳しく、漁も休みだ。店の硯の水が凍っている。夜は静かで星

が輝いている。明日は天氣が良くなるだろう。

1/22 今日小樽から帰る。小樽から八時の汽車で余市に着き、馬そりで甲谷の待合所へ行く。荷物を預けて山碓町まで行き商用を足す。待合所では五〇人余りが待っている。二〇日、二一日と時化で休航したので客も多いようだ。末広丸、富丸といったが富丸に乗る。

1/23 目を覚ましたら昨夜来の吹雪で、家の中にも雪が吹き込んでい。中庭も雪でいっぱい、座敷の中は真つ暗雪を除けて家の中を明るくする。子どもたちも学校へ行ったが休校になった。こんなに吹雪が続くのも珍しいことだ。午後になつてようやく晴れた。佐渡から干柿が小包で届いた。

1/24 一〇時頃からまた雪が降り出した。カレ網も出たがすぐに戻った。町中雪の置き場もなく、馬そり一〇台余りで浜へ雪投げをしている。家でも一台頼んで雪投げをする。夜になると寒さがいつそう厳しく、二七度F(マイナス二・八度C)になった。硯の水、水がめ、倉の中

のりんごまで凍った。こんな寒さは珍しい。

1/25 天気は良いが寒さが厳しい。沖はまだ波が高いのかカレ網は出戻りだ。今年ぐらい時化の多い年はないのではないか。新聞では岩内、余市辺りの漁師も時化のため漁がなくて困っているとのこと。また秋田、

直江津、津軽方面では何十年来の大雪で寒さも厳しいとのこと。店は朝から忙しい。島泊から客があり、六〇余円現金で売

その外町内で合計十二百間余り出た。学校では今日一年生と二年生の実地授業見学について、保護者会があるというので妻が行く。一〇時頃戸外に出て見ると、電灯会社の三百燭光が実に

明るい。電灯がついて町もよくなった。空を見ると明日は天気が良くなるだろう。

1/26 今日天気が良いかと思っていたら雪で時化になった。こんな年もない。寒さも厳しい。今日も網が千間も出た。美国方面からの問い合わせが多い。夜になりコタツに入っ

て一に二時に休む。

1/27 寒さが厳しく碓の水やインキも凍った。こんなことも珍しい。カレ網は休む。一月に入

入ってからは六日ぐらいしか出漁していない。店は一番暇な日であった。新聞によれば直江津や青森方面は依然として大雪とのこと。

1/28 今日もまた雪だ。カレ網は出た船と出ない船があり、やはり沖はまだ荒れているよう

だ。妻は⑨のねえさんの三歳の祝いに招待されて行く。母の命日なので和尚さんに来てもらう。古英丸が入り、アバ、その他一〇個程の荷物が来る。美

国共同歩方から網人用とのことである。一、六〇〇円程だが、六〇〇円入金して後は五月までに

支払うとのこと。1/30 今日寒く、水がめの水からインキまで凍っている。午後三時から平田さんで農

友会の役員会がある。2/1 雪は降っているが気温は32度F(零度C)と大分ゆるんだ。刺網五〇〇間出たがまだ予想した程ではない。海は穏

やかでカレ網が出た。2/3 天気快晴 久しぶり

に青空を見る。海も上ナギだ。島泊から大村さんが来て五千間程ほしいという。今日は節分で、父が夜、豆まきをする。佐渡の安藤から「フネアルフタカセツムカ」と電信が来る。手持ちがまだあるので「テモチアリツムナ」と返電をする。

2/4 朝から雪で風はヤマセ、吹雪になった。店はアバ繩の客で忙しい。刺網が千間余り出た。入舸からの注文を小包で送る。夜、部落会の総会があるので行く。

2/8 珍しい春景色、浜へ出て見たが鰯場らしい光景だ。太陽がボカボカと暖かく、子ども等も浜に出て遊んでいる。本陣の浜では海草採りをしているのが見える。古英丸が八日ぶりで入港する。美国⑩から電話で

網、アバ繩、ロープの注文があり、明日馬そりで取りに来るという。いよいよアバ繩の出る季節となった。市場に寄ってみた

ら、イサバヤ連(町なかを女の人たちが魚を売り歩く)が大勢せりをしていて盛んだ。

2/10 今日快晴 上ナギだ。カレ網は皆出たが、一月中と

違い値段が安いのであまり元気がない。スケト(スズキ)が沢山獲れる。カレ網も八分どおり終わったようだ。佐渡から平安丸が入港、一五〇一六〇個の荷物が着いた。暖気で雪も消え、彼岸の頃のようなだ。

2/12 今晩四時頃、突然ガヤガヤと人の声がするので何事かと起きてみると、半鐘の音が聞こえてきた。火の手も見えないので聞いたところ、新地方面でこの雨で洪水騒ぎだとい

う。そのうち人も多く出て来て走って行く人もいる。床下浸水したところもあるという。消防や青年団など多数出ている。丸山町方面では次第に増水していると

いう。水騒ぎも一〇年来ないことだ。近所を見舞い九時頃帰る。港町の木材会社隣りにあった、伊藤大工さんの板倉が雪崩でつぶれたとのこと。

2/13 古英丸が久しぶりで入港する。網、ミゴ繩などが着く。今日も山下へ繩二〇丸程出たが、去年の残りもあり貸し売になるのは閉口だ。禅源寺では花まわりの法事があり、妻等が行く。※(次ページ3段目へ)



十二月三十一日

起床八時、いよいよ大正十年も本日で終わりだ。本年は先ず大した心配なこともなく、家内打ち揃って迎年することを得たのは喜ばしいことだ。商品においても別に損害もなく、アバ縄等は予想以上に利益あり、これを処分せば余程のもうけになるのだ。熊さんは掛取り、今日も時化で沖休み。鮮魚はどこも不足だ。午後五時頃、茶の間に子供ら四人、悦と五人、父と六人お膳を供えて馳走を出す。子供らは大喜びだ。予めめでたく三十七歳を迎えた。家内中変りなく、何より幸福と喜ばねばならぬ。今日も一日中吹雪。

（日記原文）

起床八時、愈々大正十年も本日デ終リダ。本年ハ先ヅ大シタ心配ナ事モナク、家内打揃ッテ迎年スル事ヲ得タハ喜バシイ事ダ。商品ニ於テモ別ニ損害モナク、アバ縄等ハ予想以上ニ利益アリ、之ヲ処分セバ余程ノモウケニナルノダ。熊サンハ掛取り、今日モ時化テ沖休ミ、鮮魚ハド

豊 雅 こうは月年ぬえたも思てれか嘆許さぬぎ過に徒

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |                |            |            |            |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|------------|------------|------------|
| <p>十二月三十一日<br/>土曜<br/>戊辰<br/>十二月三日</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | <p>天 氣 寒 暖</p> | <p>來 信</p> | <p>發 信</p> | <p>豫 定</p> |
| <p>コモ不足。午後五時頃、茶の間<br/>二子供等四人、悦と五人、父と六<br/>人御膳ヲ供ヒテ馳走出ス。子供<br/>等大喜ビタ。予モ目出度卅七歳<br/>ヲ迎ヒタ。家内中変リナク、何ヨ<br/>リ幸福ト喜バ子バナラヌ。今日<br/>モ一日中吹雪。<br/>※原文にはありませんが、適<br/>宜、句読点をつけました。</p> <p>※（前ページから続く）<br/>2/14 暖気になったようだ<br/>が風が少し冷たい。店はヒマだ<br/>ったが刺網九〇〇間、アバ縄一<br/>〇丸以上も出た。午後一時から<br/>禅源寺で禅学会の会合があり行<br/>く。説教師の説教があり、後、夜<br/>食を馳走になり、本堂で修証儀<br/>の読経をし、終わって説教を聞<br/>き、帰ったのは九時頃であつた。<br/>2/15 快晴 海は上ナギ。島<br/>泊から大村さんが船で来て千<br/>間、美国から船で来てアバ縄刺<br/>網が出る。困漁場へ網一一反届<br/>計千円以上の品だ。一日中売り<br/>出しのような忙しさだつた。<br/>（以下次号）</p> |                |            |            |            |

の間でもありました。

また、アイヌ部落の長が住んでいる周辺の地形の特徴から地名をつけ、それが広い地域の地名になったのではないか、という考えもあつて、ではそれはどこかというところ、アイヌの人たち多く住んでいたであろうチョベタン河口付近の崩れたところや、役場付近の丘（以前は正隆寺の丘が役場の裏まで続いていた）であろう、というのがあります。

# □疑問が残る地名

昨年、道が『アイヌ語地名リスト』という本を刊行しました。その本には、どの程度アイヌ語からその地名の由来や意味など確かめることができるか、ということをもA・B・Cの三段階で表わしています。

AⅡ一定の根拠から解釈することとができ、ほぼ確かである。

BⅡ根拠が十分でないが、推論から納得できる。

CⅡいろいろと説があり、元の形がはっきりせず、現時点では「不明」としか言えない。

確定するための条件として次の4点があげられています。

○ 1. 「発音や意味から語源はアイヌ語と認められる」

○ 2. 「地形や事実関係からそのように解釈でき、それが地名になったのも妥当である」

○ 3. 「根拠となった場所や地形が確認できない」

× 4. 「諸説があつて特定することができない」

上につけた○×の意味は、○Ⅱ条件に合っている

×Ⅱ情報不足で判断できない

丸山の崩れた崖、フル・ピラ？



ということ、古平の語源については、このリストではCランクとなっています。

しかし、地形というものは永い間には変わるものですから、フレピラⅡ赤い崖は果たしてどこだったのか、それをこれから確かめてみるのも、古代といかないまでも、昔のナゾを追う楽しみがあるというものです。

昔からの古平の地名

古平の地名のほとんどはアイヌ語ですが、昔からいろいろと書き表されてきました。

古平の表記

古 平

寛文二年（二七〇）

寛文年間（同）

元禄三年（二七〇）

享保五年（二七〇）

享保六年（二七二）

宝暦六年（二七五）

安永九年（二八〇）

寛政元年（二八九）

天保五年（二八四）

安政元年（二八四）

安政二年（二八五）

安政四年（二八七）

（同）

これで見ますと、かなり以前から【古平】の文字が使われて

いたようで、明治になり、行政区画で郡が定められて古平郡となり、町村制でそのまま現在の名称になったわけです。

○古平と赤平

明治の頃から炭鉱として栄えた赤平の語源は、古平と同じ『フレピラ』だといわれています。

フレピラⅡ赤いという意味から漢字で赤、ピラという発音から平の字を当てて赤平と命名したもので、語源の由来は同じだと考えられます。

以前、赤平市から送られて来た写真を見ると、古平の語源とされている古平川の断崖とよく似た地形でした。

□町内の地名

昔から、そこに住んでいる人たちは何か特徴を見つけてその場所に名前をつけたようで、その外も合わせて、町内の地名は五〇を超えています。

これらの中から現在に使われていないものや、場所がはっきりしていないのが戸籍台帳などに残っているものなどあり、地名の調査もなかなか大変です。

（この項続く）



# 古平いろはうつた



## 赤い崖 フレ・ピラが名の起こり



### □北海道の地名

北海道ではアイヌ語にちなんだ地名が大変多く、アイヌ語の発音をそのままカナ文字にしたもの、それに漢字を当てはめたもの、アイヌ語を日本語に訳してしまったもの、一部を訳したもののなどいろいろですが【古平】という地名は、アイヌ語の発音に漢字を当てはめて命名したものです。

### □古平の名の由来

【古平】の語源は、アイヌ語の【フレ・ピラ】【フル・ピラ】に近い発音から名付けられたもので【フレ・ピラ】というのがあります。

アイヌ語は日本語にはない発音ですから、アイヌ語を聞いた人はそれに近い音をかな書きにしたので、聞いた人によって多少違いがあるのは仕方ありません。

ん。英語をカナ書きするのと同じことです。

それと、地域によっては、アイヌの人たちにも方言といえるものがあつたかも知れません。そうになると、同じことであつても書き表し方（表記）にも違いが出るのは当然でしょう。

アイヌ語で、フレ・ピラ・ピラ・ピラという意味だといわれていますが、ではその崖がどこにあるか、となるとどうもはつきりしません。

また、フル・ピラという意味ですが、地名ではフレ・ピラの方を取り上げています。

古平川の上流にホリカ・フレ・ピラという地名があり、それからフレ・ピラの名が地名になったようです。ホリカ（ホルカ・ホリカ）というのは川が大きく蛇行していて、ゆるやかな流

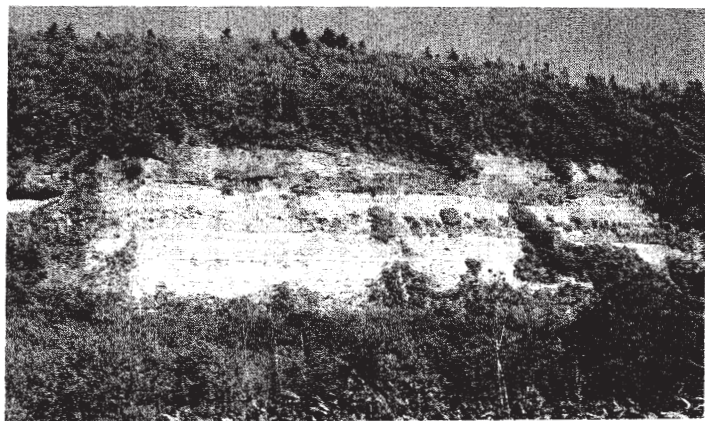
れが逆の方向に流れているように見える川のことを言います。

### □川岸の赤い崖

古平川を川口から二キロ程逆上った辺りの川岸に、昔から地域の人たちが『赤はげ』と呼んでいる、赤味を帯びた崖の続いている場所があります。

この崖の下は渚になっていて、子どもたちの絶好の泳ぐ場

△古平の語源ともなった古平川  
川岸の赤い崖、フレ・ピラ？▽



△道々から見た赤い崖の続く川岸▽



所になっていたそうです。

古平の語源になっている『赤い崖』はこの辺りか、という説が有力ですが、海からもよく目立つ丸山の崖が語源ではないか、ともいわれています。

フレ・ピラ・ピラとい、フル・ピラ・ピラでは発音が似ていますから、フル・ピラ・ピラだとすると、フル・ピラとなり、「丘」と「崖」という意味から考える丸山も当てはまるように思えてきます。

この二説は、以前から研究者

# 沢江婦人会 誕生

大澤 文子

降り止まぬ晩夏の雨は冷たい。空を暗めるのも早い。その頃であろうか。沢江町の男性役員と糸井はるえさんがわが家へ「話があるので……」と見えた。「えっ何？」一瞬怪訝な思いだったが、夫も在宅だったので居間へ通ってもらった。

「実は……」口ごもりながら役員のひとりが切り出された。「実は、沢江町に婦人会がないので是非つくりたい。力を貸してほしい」とのこと。突然なので頭の中は拒否するのみ。糸井さんは「お願いよ、お願いよ」と目くばせしている。ダメを押し通す私に、夫は「折角皆さんが来てくれたのだから、どうしても嫌だというのなら公民館へ行ってお断りしてくれば……」と口添えをしてくれた。

その言葉にうながされて、私は「ではお断りを……」と、糸井さんの差し出す傘に入った。「断ってもダメダメ」傘の中で

糸井さんは幾度も言う。だが私の心の中は、お断りの言葉を懸命に探していた。

公民館はさほど遠くはない。「さあ入って！」糸井さんに背中を押され一步公民館の中へ足を踏み入れた途端、割れんばかりの拍手、拍手！驚きで言葉も出ず、上がり口へべったり座りこんでしまった。いくら頭を下げてでも許してはもらえず、拍手は止まなかった。

「明日からいろいろ準備して下さいよ」と、男性役員からは優しい言葉が返ってきた。

「仕方ないかな？」私のどこかでかすかに返事する声が出た。何日か考える時間をもらいわが家へ戻った。「まあ仕方ないサ、沢江の住民だもんな」と、夫はこともなげに言う。

無から期待される会を結成することはむづかしい。一室にこもり思案した。会員募集、会則、役職、行事等々、考えなけ

ればならない事項は盛り沢山。

だが意を決し、設立総会を昭和四〇年十一月八日午前一〇時と決定。列席していただく町長様はじめ、町内の来賓の方々への案内状発送と目まぐるしく時間は過ぎ、またたく間に設立総会当日となった。

会員七十二名、装いも新たに緊張の朝を迎えた。準備、準備に没頭。一応お花も飾り付け、秋晴れのような和やかな式場は出来上がった。

古平町長伊藤由松様をはじめ来賓二三名をお迎えし、この上ない喜びと緊張の数時間であった。町長様からは特に「和」の文字を大切にするようにとの温かい講話と、婦人会の名称は『沢江婦人会』がいいのでは、

とのお言葉がありそれに決定。なお、ご無理とは思ったが揮毫をお願いしたところ、筆鋒鮮やかな『沢江婦人会』の書をいただき一同感激したものだった。

書は後に掛け軸に表装し、ことあるごとに会場に掲げては会員一同心を新たに研修に励んだ。

翌年には町や後志婦連協、全道大会にも加盟して活動した。

会の年中行事として一番に挙げるのは、何といってもバザーであろう。衣料品や手芸品から野菜類等々、他町村からも買い手がある程の盛況。収入源でもあり楽しみの一つだった。

昭和四三年五月からは『婦人会便り』も発行。また、女性として書く読むの必要性を考え、昭和四九年からは文集『私のひとりごと』を発行。一年間のつづき、詩、短文学等々、結構会員もペンを持つてくれるようになりうれしく思った。

なお、北海タイムス・後志版に堂々と、写真入りで『私のひとりごと』が掲載されたのもうれしい限りであった。

あれから何年経ったであろうか……。私はいま札幌のわが家の一室で思い出に浸っている。沢江婦人会の四〇周年を迎えるのも程遠くはないであろう。

どうぞ丹後初江会長と共に「和」の一文字を守り、創立四〇周年の佳き日を必ず迎えて下さるよう念じてペンを描く。

年ごとに世は変はれども  
こころある「和」の道あゆみ  
佳き日迎えよ



# 中 戦

## 泣き笑いの 樺太漁場体験談

## 戦 後

吉 野 慶 一 郎

切り上げて従業 無事である  
員を船で送る ことを祈り  
ながらもどうすることもできな  
いまま、先走って法要までする  
という当時の不安な情勢でした  
が、実はもう一つ心に懸かる心  
配ごとがありました。

話は少し前に戻りますが、昭和  
二〇年は、スケソ漁も春ニシ  
ン漁も期待した通りの好漁で喜  
んでいましたが、引き続き、  
夏ニシン（油ニシン）の流し網  
漁稀にみる程の大漁で、魚油や  
しめ粕の製造に連日のように多  
忙を極め、粕干しにも予想外の  
日数がかかってしまいました。  
とうとう八月に入ってしまった

ましたがお盆も近づいて来まし  
たので、北海道や本州から働き  
に来ていた人たちは帰ることに  
なりました。

の発売が制限されていて特に遠  
距離へのキップは、一度に多人  
数分を求めることなどできない  
時代でした。そこで、仕方がな  
いので自分のところの漁船で全  
員を送り帰すことにしました。  
乗り込んだのは古平、岩内、  
山形県（庄内地方）から来てい  
る一〇余人の人たちでした。  
山形県でも庄内地方は有名な  
米の産地でしたが、現地では肥  
料と米との物々交換ができたか  
いいうことを聞いていましたか  
ら、この機会を利用して食糧の  
確保をしようと、そのためのニ  
シン粕も積み込んで、八月六日  
野田の港を出港しました。  
故郷への これで先ずはひ  
安着を喜ぶ と安心、と思っ  
たのもつかの間、その後すぐ広  
島、続いて長崎への新型爆弾  
（原子爆弾）投下という恐ろし

いニュースが報道されました。  
ところで、出港した船からは  
その後も何の連絡もないまま、  
「どうしているものか？」と心  
配はつりますが、ただただ無  
事を祈るばかりでした。  
やがて、出港してから一週間  
目に初めて連絡が入りました。  
「古平、岩内を経て、山形県酒  
田港に入った」という知らせで  
した。  
「これで全員無事に帰宅させ  
た。船の点検整備と、米の件が  
終わり次第帰途につく」という  
ことで、今までの心配も喜びに  
変わりました。  
大漁を喜び家 樺太の夏は  
族総出で仕事 短かく、そ  
して去るのも早い。暦が立秋を  
告げる八月初旬にはもう秋風が  
立ちそめ、周囲にも秋の気配が  
濃く漂ってきます。  
従業員を送り出した翌日から  
は家族総動員で、毎朝早くから  
浜へ出て残りの粕干しに精を出  
していました。これを干し上げ  
て出荷すれば前半の仕事は一応  
終了したことになり、あとは清  
算する楽しみがありました。  
今のところすべてが順調に進

んでいるので、あとは必ずいい  
結果が出るはずと、取らぬタヌ  
キの皮算用を立てていました。  
親父は女の子たちに「粕干し  
が終わったら、何でも欲しい物  
を買ってやるからナ」と、上機  
嫌でした。  
しかし、子どもたちは「今は  
店に欲しい物なんか何にも売っ  
てないよ」と、口を返していま  
したが、実際、最近各商店と  
も品物が少なくなり、残品整理  
をして店を閉めるところが多く  
なってきました。以前のように  
何でも買えたという時代は、い  
つの間にか樺太でも次第に過去  
のものとなっていたのです。  
そして迎えた この日は朝か  
八月一五日 快晴、太陽が  
激しく照りつけ珍しく真夏のよ  
うな暑さで、水平線も山々もふ  
だんより間近に見えるようで、  
不思議な、何か異様な現象が感  
じられるような日でした。  
わが家では総動員で残りの粕  
干しをし、この天気では今日中  
に全部干し上がるメドがつき、  
皆元気に快い汗を流し、夕方に  
片付けことにしていったん家に  
戻りました。

（続く）

# 靖国の英霊に捧げる鎮魂のラッパ

—序 章—

一語に尽きるだろう。

——召集令状——

この手記は、私が今から半世紀前に経験した軍隊生活と、昭和二〇年八月九日、突如、

昭和一八年四月二五日のこ

樺太(サハリン)の日ソ国境線を突破し攻め寄せて来たソ連の大軍と、これを迎え撃つ日本軍とで、壮絶な死闘が展開され、その地獄からの生還の記録である。

これは終戦の混乱期にあった出来事であり、あまり世間には知られていない戦闘だったが、戦った私たちにとっては悪夢のような惨憺を極めた戦いだった。

思いもしない攻撃により玉砕寸前まで追い詰められ、弾薬、食糧の補給も絶たれながらも死の運命に素直に従い、その時々を精一杯に働き行動していたら、いつの間にか生き残っていた。

よくぞ生きて還れたものだと思う。それはまさに奇跡という

## 老兵の綴り方

### あゝ、樺太国境守備隊

—1—

橘 義 春

と、東京の勤務先に、郷里の古平町の祖父から「軍務公用すぐ帰れ」という電報がきた。入隊先は盛岡の北部六二部隊だった。どうして私のような瘦せて体力もない、体もさほど大きくない、どう見ても兵隊になれそうもない者まで強制的に入隊させるのか、もつとがっかりした体格の連中が大勢町中によくうよいいるのにと、憤慨

したところでしょうがないと割り切り切り、どうせ三か月の教育召集なんだろうからと、自分に納得させた。

在京の郷里の先輩や後輩たちの「万歳、万歳」という歓呼の声に送られて、上野駅を夜行列車で出発した。

翌日、余市の棧橋から船に乗り、古平港に到着。ここでも弟たちや親戚、同級生など大勢に迎えられて久しぶりのわが家に着いた。

その晩は、あまり物の無い時代にもかかわらず、祖父が私のために無理をしてそれこそ山海の珍味を山ほど集め、親戚や隣り近所を呼んで盛大な壮行会となった。その席で祖父は、

「わが家から初めて兵隊が出た。非常に名誉なことである」と言つて、終始にこにこしていた。

翌朝、早起きして神社に無事帰還を祈念し、隣り近所の挨拶まわりをして船着き場へ行った。同級生の本間徳男君、田中春雄君、金子幸治君の三人が同時に召集になっていた。

私たち四人を送るために町の

人たちが続々と集まって来て、船着き場は黒山のような人出であつた。余りの大勢の人で、四人共緊張して上がりっぱなしで

いたら、近所の桶屋のおじさんが大声で、「よっちゃん、元気がないぞォー」と名指しで言われた。よし、それなら元気のいいところを見せてやろうと、実はカラ元気だったが大声で、「勝つて来るぞと勇ましく、誓つて国を出たからは……」と歌つたら、そのあとは見送る人、見送られる私たち四人の大合唱になり、その歌声はふるさとの大海原に響き渡り、出征兵士として壮途につく私たちの気持ちと、どんなに勇気づけてくれたのか——。

船が港を出て船影が小さくなったと思われるまで、皆が手に小旗を振つて見送つてくれた。

小樽駅で、召集者を乗せる列車を待つていたら、これも同級生の藤田泰和君が、隣組の人たちに送られて来たのにはびっくり会った。彼も召集とのこと、徴兵検査以来一年ぶりでの出会ひであつた。

(続く)



短歌

古平町岬短歌会

民宿の塀に数多く取り付けし鉢も花終え茎は素枯れぬ  
みどり児に瞬きもせず見詰められ恥づかしくなると言ひ  
し人あり

奥山 きよみ

病院の同室のおばさんは九六歳娘のやうだとはげまし  
下さる

病室の窓よりながむる巨き花火は小樽の夜空に明るく  
輪をなす

竹内 コト

秋立つと思ふ涼しき舅の忌に祈ればやさしその面浮かぶ  
さんなしとほととぎす活けて玄関に秋を楽しむその  
黄葉色

堀 典子

外つ国に学べる孫よ良き友と風邪引かず居よ世毎に思ふ

池田 テル

俳句

古平ホトトギス会

人生も終わりに近し木の葉髪 斉藤波留  
マルメロの匂ひ漂う秋うらゝ 山口悦子  
落葉樹にひとひら朱く残りけり 越野敏雄  
庭手入れ少し残りて冬に入る 大和田絵伊

久しぶりに手を触れてみる啄木の像すべらかにして  
丸みをおぼゆ

鈴木 時子

新鮮な鮭の鰭ご輝いてオレンジ色の真珠のやうに

田中 香苗

木立の中散り敷く落葉手に払ひ岳轉和尚の歌碑見せて  
くださる

丹後 初江

出勤の往き交ふ木々の冬めくる 関口勝志

干大根ほどよき午後の日差し受け よしざきり

口切りの茶事に招かる子の晴れ着 仲谷比呂古

海霧襖沖の果てより迫り来る 越野清治

秋始末足踏みミシン粗大ごみ 室屋弘子

幸平 吟

鯰抜く娘にラーメンの出前でし

鯰船待つ間に娘等の薄化粧

明日からは鯰の釣場変わるとか

寺参りがてら銀杏二たつかみ

銀杏のこぼるゝ寺の石だたみ



# 古平町史年表

— 7 —

明治6年～明治11年

## 明治6年(1973)

- ◆開拓使古平出張所に関口利勝権少主典、宮崎彦八使掌らが詰める。
- ◆古平・美国間の道路が開かれる。
- ◆関口利勝が退官し、古平川流域の開墾に着手する。
- ◆余市開墾場から堀太冲が来て、新地町で子供に手習いなどをさせたが、翌年、浜中の教育所に移る。

## 明治7年(1874)

- ◆行政区画に北海道大・小区制が実施され、古平・美国・積丹が第五大区となり、古平郡は沖村・沢江村・歌棄村・浜中村が第一小区、入船町・新地町・垂美村・群来村が第二小区となる。
- ◆開拓使古平出張所は開拓使古平分署となる。
- ◆駅通所に古平郵便取扱所を開き、種田漁場の支配人・広谷新三郎が初代郵便取扱役になる。
- ◆漁場を開いていた有川村の種田金十郎が、開拓使の命により丸山下の湿地を埋め立て丸山町地区を造成した。その功績によって開拓使から鯨漁場一か統と金30円が与えられる。
- ◆海関所出張所が置かれ美国を管轄する。
- ◆浜中村真宗寺留守居の僧石塚賢蔵が教育所の設置を願い出て、寺院が教育所となる。

## 明治8年(1875)

- ◆海関所出張所を船改派出所と改称する。

## 明治9年(1976)

- ◆古平に公立病院が建てられ、初代院長に高畑道賢が任命される。

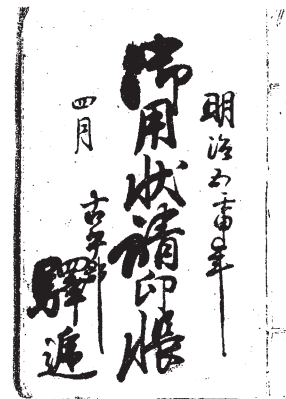
## 明治10年(1877)

- ◆浜中に小学校を新築し、校名を浜中学校とする。
- ◆汽船豊平丸が小樽・古平・余市間を運航、料金は大人が小樽まで60銭、余市まで35銭で、新地町の西島金八が取扱人であった。

## 明治11年(1878)

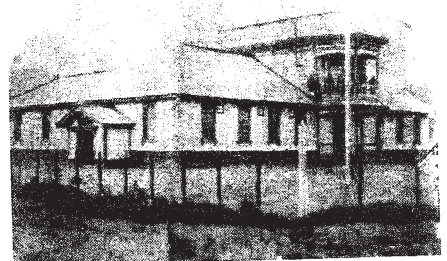
- ◆明治七年以来の総代制が廃止され、新しく総代人選挙制になった。総代の下に伍長が任命され、町内の世話と役所からの命令や指示などを伝えた。
- ◆この年の古平港の和船の入港数は1,183隻、西洋型汽船20隻で、当時の繁栄ぶりがうかがわれる。

→ 駅通所の請書台帳



↑ 古平船改所(ふねあらためよ)の役人

↓ 当時、モダンな浜中学校



→ 伍長任命書

